

鳴釜神事における「温羅伝説」と上田秋成「吉備津の釜」

— 〈鬼〉になった「温羅」と「磯良」 —

萩原 桂子

岡山理科大学教育学部中等教育学科

(二〇二二年十月三十一日受付、二〇二二年十二月五日受理)

一、はじめに

吉備地方に古くから伝わる昔話「桃太郎」のアイコンである〈桃〉と〈鬼〉が、古代吉備の戦いの表象であることに着目し、地域研究として日本古代史や日本民俗学の研究方法を取り入れながら、岡山の「桃太郎」と関連が深い「温羅伝説」の資料を解説することで、鬼神「温羅」の正体を解明する。「鳴釜神事」における「温羅伝説」と上田秋成「吉備津の釜」に描き出された〈鬼〉になった「温羅」と「磯良」を読み解くことで吉備地方を中心とした〈鬼〉について考察する。「心の鬼」とは、①ふと心に思い当たる良心の呵責。②心の奥に潜んでいるよこしまな考え。『大辞泉』小学館）であることから、日本人の裡にある良心であると同時に邪心を発動する〈鬼〉の正体を剔抉することで、「鬼の棲む街」として伝説に描かれた岡山を探索するとともに、人と鬼との切ない物語について論究する。

岡山には、「温羅」の居城だった「鬼ノ城」（総社市）や吉備津彦命を祀る吉備津神社（岡山市）、「温羅」の首が埋まる釜の鳴音で吉凶を卜占する「鳴釜神事」など「温羅伝説」を伝える文化遺産が岡山各地に点在する。「桃太郎」のルーツには日本国家成立の壮大なロマンが隠されている。「温かに羅なる街」岡山として国内外に向けて「なるかま神事」を、文部科学省が薦める「地域の教材化」に即し、吉備文化の歴史や産業を取り上げながら教材化することを提起する。

古代吉備に繰り広げられた「温羅伝説」にこめられた〈鬼〉の表象を解説することは、歴史、文学、民俗学を渉猟しつつ、学際的及び国際的な視点で追究できる独創的かつ斬新的な研究であることから、効果的な地域課題の解決が実現できると考える。また、「温羅伝説」の資料を実地調査と文献調査から双方向的に研究することで、若者の地域離れという課題にも向き合うことができる。

参考文献として『日本書紀』『風土記』『続日本紀』をはじめ、中国の歴史書『魏志倭人伝』『後漢書倭伝』『宋書倭伝』『隋書倭国伝』に加え、文学関連の『古事記』『万葉集』『日本霊異記』を取り上げ、〈桃〉と〈鬼〉を日本文化の表象として捉える。また、人から〈鬼〉に変化した「温羅」の「温羅伝説」と「磯良」の「吉備津の釜」をインターセクショナルリティという概念から分析する。さらに、〈鬼〉になった「温羅」と「磯良」を中心に神と〈鬼〉の関係を解明する。『日本書紀』（『日本古典文学大系』一九六七年）の〈鬼〉表記は、「おに」または「もの」と訓読みしている。『岩波古語辞典』（一九七四年）には、「オニ」ということばが文献に現れるのは平安時代に入ってからで、奈良時代の万葉集では『鬼』の字をモノと読ませている¹⁾と記されている。また、折口信夫は、「たまに善悪の二方面があると考へるようになって、人間から見ての善い部分が『神』になり、邪悪の方面が『もの』として考へられる様になった」（傍線は原文）と述べている²⁾。

二、「鳴釜神事」における「温羅伝説」

吉備津彦命を御祭神とする吉備津神社の「温羅伝説」は、この地に伝わる神話で「桃太郎」の原型になっている。吉備津神社には「矢立神事」や吉備津彦命の凱旋を祝ったといわれる「七十五膳据神事」などが祭事として今に伝わっている³⁾。

当社は大吉備津彦命を主神とし、その異母弟の若日子建吉備津日子命と、その子吉備武彦命(キビタケヒコノミコト)等、一族の神々を合わせ祀っております。大吉備津彦命は第七代孝靈天皇の皇子にあたられ、もとのお名前を五十狭芹彦命(イサセリヒコノミコト)と申し上げ、武勇の誉れ高いお方であられます。

一説によりますと、第十代崇神天皇の御代、災害もなく天下もようやく治まってまいりましたが、都から遠く離れた地方には未だ朝廷に従わない者が多数おりました。そこで天皇即位十年に皇族の中から四人の將軍を選び、印綬を授け各地方に派遣し討伐することとなりました。すなはち、北陸道には大彦命(オオヒコノミコト)、東海道には武渟別命(タケヌナワケノミコト)、丹波には丹波道主命(タニハノミチヌシノミコト)、そして西道(後の山陽道)には大吉備津彦命が派遣されることとなりました。吉備津彦命と異母弟若日子建吉備津彦命は兵を率いて山陽道を進軍し、まず播磨国に達してここを「吉備の道口」と定められ加古川の畔で神祭を行っております。

なかでも「鳴釜神事」は有名で、同じく吉備津神社ホームページに詳しい説明がある⁴⁾。

当社には鳴釜神事という特殊神事があります。この神事は吉備津彦命に祈願したことが叶えられるかどうかを釜の鳴る音で占う神事です。多聞院日記にみられるのが文献的には一番古いとされ、永禄十一年(1568)五月十六日に「備中の吉備津宮に鳴釜あり、神楽料廿疋を納めて奏すれば釜が鳴り、志が叶うほど高く鳴るといふ、稀代のことで天下無比である」ということが記されていますので、少なくとも室町時代末期には都の人々にも聞こえるほど有名であったと思われる。江戸時代上田秋成の雨月物語のなかにも『吉備津の釜』として一遍の怪異小説が載せられていることは有名です。

「鳴釜神事」の起源である「温羅伝説」についても詳しい説明が同ページに続く。

この神事の起源はご祭神の温羅退治のお話に由来します。命は捕らえた温羅の首をはねて曝しましたが、不思議なことに温羅は大声をあげ唸り響いて止むことがありませんでした。そこで困った命は家来に命じて犬に喰わせて髑髏にしても唸り声は止まず、ついには当社の御竈殿の釜の下に埋めてしまいました。それでも唸り声は止むことなく近郊の村々に鳴り響きました。

命は困り果てていた時、夢枕に温羅の霊が現れて、
『吾が妻、阿曾郷の祝の娘阿曾媛をしてミコトの竈殿の御饌を炊がめよ。もし世の中に事あれば竈の前に参り給はば幸有れば裕に鳴り禍有れば荒らかに鳴ろう。ミコトは世を捨てて後は霊神と現れ給え。われは一の使者となって四民に賞罰を加えん』
とお告げになりました。命はそのお告げの通りにすると、唸り声も治まり平和が訪れました。これが鳴釜神事の起源であり、現在も随時ご奉仕しております。

「温羅」の愛した「阿曾女」についても、行事の方法とともに同ページに述べられている。

御竈殿にてこの神事に仕えているお婆さんを阿曾女(あぞめ)といい、温羅が寵愛した女性と云われています。「鬼の城」の麓に阿曾の郷があり、代々この阿曾の郷の娘がご奉仕しております。またこの阿曾の郷は昔より鑄物の盛んな村であり、御竈殿に据えてある大きな釜が壊れたり古くなると交換しますが、それに奉仕するのはこの阿曾の郷の鑄物師の役目であり特権でもありました。

この神事は神官と阿曾女と二人にて奉仕しています。阿曾女が釜に水をはり湯を沸かし釜の上にはセイロがのせてあり、常にそのセイロからは湯気があがっています。神事の奉仕になると祈願した神札を竈の前に祀り、阿曾女は神官と竈を挟んで向かい合って座り、神官が祝詞を奏上するころ、セイロの中で器にいれた玄米を振りまきます。そうすると鬼の唸るような音が鳴り響き、祝詞奏上し終わるころには音が止みます。この釜からでる音の大小長短により吉凶禍福を判断しますが、そのお答えについては奉仕した神官も阿曾女も何も言いません。ご自分の心でその音を感じ判断していただきます。

「温羅」の「阿曾女」への想いが「鳴釜神事」を支えていることがわかる。吉備津神社には御釜殿があり、古くは鑄物師の村である阿曾郷(現在の岡山県総社市阿曾地域)から阿曾女、伝承では「阿曾の祝の娘」を呼んで、神職と共に神事を執り行った。現在も神職と共に女性が奉祀しており、その女性を阿曾女と呼んでいる。まず、釜で水を沸かし、神職が祝詞を奏上、阿曾女が米を釜の蒸籠の上に入れ、混ぜるとうなる様な音がする。この音は「おどうじ」と呼ばれ、神職が祝詞を読み終える頃には音はしなくなる。「温羅」の首は死んでもうなり声をあげ続け、犬に食わせて骸骨にしてもうなり続け、御釜殿の下に埋葬してもうなり続けた。これに困った吉備津彦命に、ある日温羅が夢に現れ、温羅の妻である阿曾郷の祝の娘である阿曾媛に神饌を炊かしめれば、温羅自身が吉備津彦命の使いとなつて、吉凶を告げようと答え、神事が始まったというのである。この神事のはじまりは「温羅」の「阿曾女」への一途な愛であつたのである。

古代吉備の遺産を文献及び実地調査から掘り起こし、「温羅」の居城だつた「鬼ノ城」や吉備津彦命を祀る吉備津神社、「温羅」の首が埋まる釜の鳴音で吉凶を卜占する「鳴釜神事」など、「温羅伝説」を伝える文化遺産を調査することで「人と鬼」との関係が解明できる。

朝鮮半島に、「鬼ノ城」とよく似た石垣の城があることから、「鬼ノ城」は朝鮮の山城なのか、北九州や中国四国地方に見られる「神籠石」と呼ばれる山城なのか、長い間論争されたが、現在では朝鮮半島式の山城説が有力である。

美作国一の宮である「中山神社」は、平安時代末期に書かれた『梁塵秘抄』によれば、「安芸の厳島」と「備中の吉備津神社」とともに「関西の大社」と肩を並べて記されている。また、吉備地方には、「榑築遺跡」や「造山古墳」、「作山古墳」など畿内に匹敵する大規模な遺跡が散在している。祭事に使われた土器や埴輪の原型から大規模な墳墓が想定され、ヤマト中央政権に対して脅威となる勢力と文化が古代吉備に存在していたことを物語っている。「温羅伝説」は「温羅」と吉備津彦命の戦いは古代吉備とヤマト中央政権との対立であつたことを表象している。

三. 上田秋成「吉備津の釜」

「鳴釜神事」とは、釜の上に蒸籠を置いてその中にお米を入れ、釜を焚いた時に鳴る音の強弱・長短等で吉凶を占う神事である。また、初期古墳上に見られ、埴輪の起源とされる特殊器台形土器は、この御釜と関係があるのではとの説もある。「鳴釜神事」を題材にした「吉備津の釜」は上田秋成の『雨月物語』巻之三に収録されている江戸時代後期の読本である。

『雨月物語』「序」は明和五年(一七六八)に書かれ、全五巻が安永五年(一七七六)に刊行された。日本と中国の古典から脱化した怪異小説九編からなる。内容は中国の白話小説の翻案によるところが大きい。当時の古典を踏まえつつ和文調を交えた流麗な文体で書かれ、著者の思想が加えられている。「吉備津の釜」冒頭の妬婦論は、『五雑俎』巻八による。各篇の並びは「白峰」(巻之一)、「菊花の約」(巻之一)、「浅茅が宿」(巻之二)、「夢窓の鯉魚」(巻之二)、「仏法僧」(巻之三)、「吉備津の釜」(巻之三)、「蛇性の姪」(巻之四)、「青頭巾」(巻之五)、「貧福論」(巻之五)であるが、高田衛は「各編の執筆の動機にも重なるような連関がある。」と述べている。九編の奇談が、生者と死者の間を、雨と月を背景に交錯するさまが、鬼気迫る怪異のなかで語られる。

上田秋成は、明和三年（一七六六）に処女作である『諸道聴耳世間猿』を、明和四年に浮世草子の『世間妾形氣』を書いた。『雨月物語』の「序」には「明和戊子晩春」とあり、明和五年晩春に『雨月物語』の執筆が終わっていたことになる。しかし実際には『雨月物語』が刊行されたのは、その八年後の安永五年（一七七六）のことであった。

「吉備津の釜」のあらすじは、吉備国賀夜郡庭妹（現在の岡山市北区庭瀬）に井沢正太夫という男がいた。息子の正太郎というのは女癖の悪い男で、嫁を迎えて身持ちを固めさせようと、吉備津神社の神主である香央造酒の娘「磯良」と縁組がまとめられ、「御釜祓い」をしたところ全くなんの音もでなかった。この婚姻は凶と判断された。このことを香央が自分の妻に伝えると、この様な不吉なことを公表すればどうなるかわからないと、そのまま縁組は進められた。「磯良」は大変できた女で、家に良く仕え、非の打ち所がなかった。正太郎も初めは「磯良」のことをよく思っていたが、いつのころからか外に袖という遊女の愛人をつくり、家に帰らなくなつた。井沢の父は、正太郎を一室に閉じ込めたため「磯良」は袖の世話もしたが、正太郎は「磯良」を騙し、金を奪って袖と駆け落ちしてしまつた。「磯良」はこのあまりの仕打ちに病気で寝込むようになり、日に日に衰えていった。一方、正太郎は袖の親戚の彦六の厄介となり、彦六の隣の家で袖と仲睦まじく生活していたが、袖は物の怪にでも憑かれたように衰弱し、看病の甲斐なく七日後死んでしまつた。正太郎は悲しみつつも菩提を弔つた。墓参りをする生活が続いたある日、いつものように墓にいくと女がいて事情を聞くと、仕える家の主人が死んで、伏せてしまつた奥方の代りに墓参りをする生活が続いたという。美人であるという奥方に興味を持った正太郎は、奥方と悲しみを分かち合おうと女の家を訪問することになつた。小さな茅葺の家のなか、屏風の向うに奥方はいた。正太郎がお悔やみのあいさつをすると、屏風から現れたのはまさしく「磯良」だつた。血の氣のないその姿も恐ろしく、正太郎は氣絶してしまつた。氣づくところ三昧堂だつたので、慌てて家に帰つて彦六に話すと、陰陽師を紹介された。陰陽師は正太郎の体中に古代漢字のようなものを書いて、今から四二日間物忌みをし、死にたくなければ必ず一歩も外に出るは行けないといつた。その夜、いわれた通り物忌みをしていたところ、女の声が出て、「あなにくや。こゝにたふとき符文を設つるよ」といつた。そして続く声の恐ろしさを感じながら、やつと四二日目を迎えた。やがて夜が明けたのを見、彦六は正太を壁越しに呼び寄せると、「あなや」と正太郎の叫び声がある。慌てて外に出てみると、外はまだ真つ暗で、正太郎の家の壁に大きな血のあとが流れており、軒に髻がかかつているのみで、正太郎の行方は分らずじまいだつた。このことが伝えられると井沢も香央も悲しんだ。「鳴釜神事」の御祓いは正しい結果を示したものである。

「妬婦の養ひがたきも、老いての後其の功を知る」と。咨これ何人の語ぞや。害ひの甚しからぬも商工を妨げ物を破りて、垣の隣の口をふせぎがたく、害ひの大なるにおよびては、家を失ひ國をほろぼして、天が下に笑を傳ふ。いにしへより此の毒にあたる人幾許といふ事をしらず。死して蟒となり。或は霹靂を震ふて怨を報ふ類は、其の肉を醃にするとも飽くべからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく脩めて教へなば、此の患おのづから避くべきものを、只かりそめなる徒ことに、女の慳しき性を募らしめて、其の身の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは氣にあり。婦を制するは其の夫の雄々しきにありといふは、現にさることぞかし。

上田秋成は、「吉備津の釜」の冒頭で、『五雜俎』巻八の儒教的家父長制の見地から「妬婦」すなわ嫉妬深い女を諫め、男のちよつとした浮気によつて、「女の慳しき性」すなわち女の本性が発火すると、とんでもないことが起こると警告する。聖女「磯良」の本性は、正太郎の裏切りによつて物凄い鬼女へと変化してしまつたことになる。「女の慳しき性」は、凄まじいものであることが作品結末に描かれる。鬼女となつた「磯良」は吉備津神社神主の娘として聖域で成長し、人を疑うことを知らない。正太郎の酷い裏切りに心が壊れてしまつた「磯良」は、生霊となり死後は怨霊となつてしまつたのである。上田秋成は「磯良」を聖女から鬼女へと変化させ、凄惨な場面を描き出す。

いかになりつるやと、あるひは異しみ、或は恐る恐る、ともし火を挑げてこゝかしこを見めぐるに、明けたる戸腋の壁に腥々しき血漉ぎ流れて地につたふ。されど屍も骨も見えず、月あかりに見れば、軒の端にもものあり。ともし火を捧げて照らし見るに、男の髪髻ばかりかゝ

りて、外には露ばかりのものもなし。淺ましくもおそろしきは筆につくすべうもあらずなん。夜も明けてちかき野山を探しもとむれども、つひに其跡さへなくてやみぬ。

正太郎の死体は骨さえ見あたらず、「男の髪の手」だけが軒の下にぶら下がっていたという場面は、『雨月物語』の九編中でも、出色の怪異譚となり、恐怖の極点を描き出している。高田衛は「正太郎をとりつくした鬼には、単なる磯良死霊というより、もつと不可知的な「鬼」の世界が重層されていることになる」と指摘し、次のように述べている。⁸⁾

「磯良」という命名に、不可知奇怪な古代神話的な心像が復活するであろう。(中略)磯良は吉備津の神のタブーを破ることによって、自ら祟りを招いたわけだが、自らの死霊化を媒体にして、その「祟り」そのものに化身し、妬神となって正太郎をとり殺したのである。

安曇氏の祖神である海神で「安曇磯良」にも通じる「磯良」は「古代神話的な心像」でいえば、聖女としてあるべき自分と人間としての「心」に引き裂かれるのである。村瀬木綿子が指摘するように「吉備津神社という地主神の祀られている伝承の地を舞台とすることによって、その祭神とも重なる主人公磯良が霊力を發揮させていく話となっている」⁹⁾と分析することができる。「磯良」は、「鳴釜神事」の鬼神「温羅」の霊力を味方にしたのである。鳴釜神事の吉凶を疎かにしたのは母であつて、「磯良」が積極的に神意に背いたのではない。陰陽師に「鬼」と名指された「磯良」は「温羅」の霊力で正太郎をとり殺したのである。(鬼)になった「温羅」と「磯良」は、同根の「鬼」の表象なのである。

四 おわりに

後白河法皇の命で編まれた『梁塵秘抄』に「一品聖霊吉備津宮、新宮本宮内の宮、隼人崎、北や南の神客人、良御崎は恐ろしや」と詠まれている「良御崎」とは「温羅」の魂である。御崎とは御前神すなわちお使いの神を意味する。「温羅」は、吉備津彦命の従者となり、吉備の治世を護る鬼神となった。愛妻である阿曾媛に自分が眠るお釜殿の火を炊かせるといふ「温羅」の願いは切ない。(鬼)にならざるを得なかった「温羅」は英雄である吉備津彦命より吉備の人々に親しまれている。吉備津神社の「鳴釜神事」は、怨霊を鎮魂する神聖なものであつたのだ。

若井正一は「吉備津神社の神事は、というより吉備津神社という存在は、吉備の安寧にかけたミコトとその後継者との祈りの体現なのだ」¹⁰⁾と指摘している。鬼神「温羅」の壮絶な唸りは、吉備の人々を恐怖に包んだに違いない。近衛典子は「凶と出た結婚を強行したために起こった悲劇、というテーマは明確で、この作品の結構を支えているのが吉備津神社の霊験であることは疑いようがない。」と述べたうえで「この読本は当時、中国白話小説を換骨奪胎した最新のジャンルであつた。」と指摘している¹¹⁾。鳴釜神事における「温羅伝説」を上田秋成は「吉備津の釜」として近世に蘇えさせるだけでなく、人の心に「良心の呵責」を呼び覚ますことに成功したのである。

「温羅」の霊力は、「磯良」の霊験となつて表象された。(鬼)となることで初めて「磯良」は聖女ではなく一人の人間として自分の感情を表出することができた。理性でコントロールできなくなつた心は、生き霊となり怨霊となつて祟る神となる。人が祟る神として(鬼)とならざるを得ない「温羅伝説」と「吉備津の釜」は、人が自分自身の心を制御できなくなつたときにたどる悲劇を描き出している。

複雑な現実を読むうえでインターセクショナルリティという有効な概念がある。下地ローレンス吉孝の「特定の人々の欲望を封じて従属を強い、力をもつ者の便宜に殉じることを目指す権力が、この社会には、いかに重層的かつ多方向的に張り巡らされているかという分析」¹²⁾は、古代から現代までの日本文化や日本人の精神構造を解き明かすのに重要である。多文化共生やグローバルパブリゼーションが叫ばれる多様化する現代社会において、勸善懲惡だけでは解決できない問題が社会の混乱と腐敗を招くことになる。命を蔑ろにする科学が蔓延る現代社会においては、他者への想像力や他者の生命に対する関心が希薄になるなか、交差性に対応できる能力の可能性は(鬼)の研究から生まれると考えている。

付記：本研究は、令和4年度ウエスコ学術振興団研究活動費助成事業の助成を受けた研究の一部である。

注

- 1 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎『岩波古語辞典』岩波書店（一九七四年）二二八頁。
- 2 折口信夫『靈魂の話』『折口信夫全集 第三卷』中央公論社（一九五五年）二六一頁。
- 3 『縁起』吉備津神社 <https://www.kibitujinja.com/about/narukama.php> 二〇二二年一月二八日。
- 4 「鳴釜神事」吉備津神社同掲。
- 5 関裕二は、「ヤマト建国の中心的存在が吉備だったのでないか」と古代吉備の活躍について論究している。関裕二『古代史で読み解く 桃太郎伝説の謎』祥伝社黄金文庫（二〇一四年）七一頁。
- 6 『五雑俎』明の長楽出身の謝肇淛が撰した随筆で、全一六卷である。
- 7 高田衛「解説」『雨月物語』ちくま学芸文庫（一九九七年）四六六頁。
- 8 高田衛「吉備津の釜」【評】『雨月物語』ちくま学芸文庫（一九九七年）二七九頁。
- 9 村瀬木綿子「吉備津の釜」論「古代的神性をめぐって」鹿兒島国際大学『国際文化学部論集』一八巻四号（二〇一八年）三九〇頁。
- 10 若井正一『邪馬台国吉備説からみた初期大和政権 物部氏と卑弥呼と皇室の鏡を巡る物語』《下巻》（二〇一九年）一粒書房三八三頁。
- 11 近藤典子『雨月物語』の当代性―夢占と鎮宅霊符―『近世文藝』九九巻（二〇一四年）五九頁・六九頁。
- 12 下地ローレンス吉孝は「インターセクショナルリティとは、交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常的経験にどのように影響を及ぼすのかについて検討する概念である」と述べている。石田真衣／下地ローレンス吉孝「インターセクショナルな「ノイズ」を鳴らすために」『インターセクショナルリティ 複雑な（生）の現実をとらえる思想』『現代思想』青土社（二〇二二年）九頁。

* 上田秋成「吉備津の釜」の原文は、高田衛／稲田篤信校注『雨月物語』ちくま学芸文庫（一九九七年）に拠った。

参考文献

- (1) 藤井駿『岡山文庫 5 2 吉備津神社』日本文教出版（一九七三年）
- (2) 市川俊介『岡山文庫 2 2 3 おかやまの桃太郎』日本文教出版（二〇〇五年）
- (3) 中山薫『岡山文庫 2 8 4 温羅伝説―資料を読み解く』日本文教出版（二〇一三年）
- (4) 関裕二『古代史で読み解く 桃太郎伝説の謎』祥伝社黄金文庫（二〇一四年）
- (5) 柳田国男『桃太郎の誕生』角川ソフィア文庫（一九七二年）

Ura Legend in Narugama Shinji Ritual and Ueda Akinari Kibitsu no Kama

—”Ura” and ”Isora” who became ”demons”—

Keiko OGIHARA

*Department of Secondary Education, Faculty of Education
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005, Japan*

(Received October 31, 2022; accepted December 5, 2022)

Focusing on the fact that "peach" and "demon", which are icons of the old tale "Momotaro" that has been handed down in the Kibi region for a long time, are representations of the ancient battle of Kibi.

While incorporating research methods of Japan ancient history and Japan folklore, we will analyze materials on the "Ura Legend," which is closely related to Momotaro in Okayama.

At a time when the true value of Japan culture is being questioned, the demon from the person depicted in the "Ura Legend" in the Narugama Shinto ritual and the "Kibitsu no Kama" by Ueda Akinari, decipher the "Ura" and "Isora" that have become. I discussed demons and Japan people, mainly in the Kibi region.

There is a useful concept of intersectionality for reading complex reality. From ancient times to modern times, Japan people "sealed and subjugated the desires of certain people."

How multilayered and multidirectional is the power to direct the martyrdom of those who are powerful to the convenience of those who are powerful? Intersect without neglecting the imagination of others or concern for the lives of others, I believe that the possibility of the ability to respond to intersectionality from the research of demons.

Keywords: *Ura Legend*; Ueda Akinari; *Kibitsu no Kama*; narration.